26年前 8歳で交通事故死

娘が生きた証しを本に

1987年3月28日、金沢市湯涌への家族旅行での長谷さんと尚子さん

「いま書かねば悔い残る」

中能登・長谷さん

七尾・小丸山小に寄贈

中能登町小田中の主婦長谷節子さん(63)は6日までに、26年前、交通事故で亡くなった小学校2年生の長女尚子さん=当時(8)=の思い出をつづった本「なおちゃん」を自費出版した。昨年、孫が尚子さんと同じ8歳を迎えたことを機に、「いま書かなければ」との思いに駆られて一気に書き上げられた文章は、娘の生きた証しを残したいという母の愛情があふれている。長谷さんは同日、孫が通う七尾市小丸山小児童にこの本を贈った。

尚子さんは1987(昭和62)年12月15日、広場で上級生たちが世話をする子犬を、同級生と見に行く途中、道路を渡ろうとしてダンプカーにはねられた。

長谷さんは、尚子さんが亡くなって間もない頃から思い出を記した本を作ろうと考えていたが、実際にペンを取ると、胸が詰まって書けずにただ年月が過ぎていった。

昨年、孫が尚子さんと同じ学年になり、「もう後がない。最大の後悔が残る」と短期間で書き上げた。

「たった八才で、やりたいことがこれからいっぱいあったのに、しんでしまいました。」

長谷さんは子どもたちに読んでもらうため、簡単な表現と短文調を心掛けて、事故前や事故当日、その後の出来事を書いた。

尚子さんが亡くなった後の描写では「なおちゃんは、生まれたときになおのおばあちゃんに作ってもらったきれいなきものをきせてもらって、おかあさんといっしょに家へ帰ってきました。」

「なおちゃんは、白いけむりとなって空にきえていきました。もう、『ただいま』と言って帰ってくることはありません。」などと加飾を抑えた文章でつづっている。

尚子さんが長谷さんの誕生日に贈った「いつまでも元気にいてね」とつづったバースデーカード、出すことができなかった尚子さんが書いた年賀状、「天国のなおちゃんへ」と題した同級生の作文なども収録されている。挿絵は長谷さんの友人の娘で、七尾市出身の保育士木村絵里子さん(愛知県)が描いた。

長谷さんは本の後書きで、「いつも尚子に見守られているようで、私の生きざまを『おかあさん、見とるよ』と、言われているような気がします」とつづっている。

「暖かくなり外に出ることが多くなりますが、車に気を付けて、絶対に交通事故に遭わないようにしてください」。長谷さんは6日、七尾市小丸山小で2年生61人に優しく声を掛けながら、「なおちゃん」を手渡した。

著書「なおちゃん」はA5ワイド版56ページ。非売品で、北國新聞社から出版された。

長谷さん(右奥)が贈った本を手にする児童=七尾市小丸山小

なおちゃん、ごめんね。
あなたが三才頃、
夜中におしっこで布団をぬらした時、
お母さんは眠いのと寒いのとで不機嫌で
「下へ行って自分でパンツを替えておいで」
とおこったら
あなたは泣きながら
コトン、コトンと一人で階段を降りていった。
(中略)
なおちゃん、ごめんね。
あなたは、いつも何かをしたがった。
「習字の練習をする」と言って
こたつの上で習字の道具を広げた。
何枚か書いて片づける時に、こたつがけにすみをこぼしてしまった。
お母さんはひどくおこったね。
あなたは「ごめんなさい」と何べんも言って、
しくしくと泣きながら、雑巾で一生懸命ふいていた。
なおちゃん、ごめんね。
昭和63年7月15日の日記より

尚子さんの死後7カ月後に書かれた長谷さんの日記の一部

掲載日:2013/03/07 面名:CZA ページ:039

北國新聞 :朝刊